

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Usage of "soushitara" and "sousuruto" in Everyday Japanese Conversations : Analysis of the Corpus of Everyday Japanese Conversation

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川端, 良子, 伝, 康晴, KAWABATA, Yoshiko, DEN, Yasuharu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001605

会話における「そうしたら」と「そうすると」の出現状況

——『日本語日常会話コーパス』を題材に——

川端良子^a 伝 康晴^b

^a 国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域 非常勤研究員／千葉大学 博士課程

^b 千葉大学／国立国語研究所 研究系 音声言語研究領域 客員教授

要旨

日本語の条件表現は、「タラ」「ト」「バ」「ナラ」等の多様な形式があり、これまで多くの研究者によって、各形式の統語的・意味的特徴を説明する理論が提案されてきた。しかし、実際の会話を対象にした定量的な研究は十分には行われていない。本研究は、条件表現のうち「そうしたら」と「そうすると」の2つの表現に着目し、2つの形式の選択要因を明らかにするために、『日本語日常会話コーパス』を用いて、3つの分析を行った。分析1では、従来議論されてきた前件の事実関係と条件表現形式の使用傾向について分析を行った。分析2では、特定の条件表現の用法に限定して、形式の使用傾向の分析を行った。分析3では、会話は参加者同士が協力して発話の理解を達成する共同活動であるという観点から条件表現の形式の使用傾向の分析を行った。本研究の結果、「そうしたら」と「そうすると」の選択が前件の事実関係と強く関連していることが示された。また、分析結果に基づいて、条件表現の選択要因を検討し、これまでの研究では説明できない形式の使用を説明できることを示した*。

キーワード：条件表現, 「そうしたら」, 「そうすると」, コーパス研究

1. はじめに

日本語の条件表現には「タラ」「ト」「バ」「ナラ」等の多様な形式があり、各形式の間には微妙な違いが存在することから、これまで多くの研究者によって各形式の統語的・意味的特性の説明が試みられてきた (Kuno 1973, 益岡 1993, 蓮沼 1993, 有田 1993, 2017, 中島 2007)。こうした特性は、研究者が条件表現の形式を別の形式に置き換えてみたり、文の一部を変えてみたりして、意味が変化するかどうかや、自然な日本語の文として認められるかどうかを調査した結果に基づいて提案される。したがって、文を操作した結果、意味や日本語としての自然さに違いが生じる場合が議論の対象となり、形式を交換しても違いを生じない場合は注目されない。そのような一見すると違いがないように見える表現であっても、実際の言語使用の際には、何らかの要因がその選択に関わっていると考えられる。この要因の解明のためには、実際の言語使用の傾向を

* 本稿は、2017 Conference of The Oriental Chapter of International Committee for Coordination and Standardization of Speech Databases and Assessment Technique (O-COCOSDA) での口頭発表「ON THE USAGES OF CONDITIONAL CLAUSES IN JAPANESE MAPTASK DIALOGUE」の内容を基に、新たなデータを用いて分析した結果を統合して議論したものである。本研究はJSPS 科研費JP16H07416の助成を受けている。また、本研究の一部は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」(プロジェクトリーダー：小磯花絵)の研究成果である。本稿の作成において、査読者の先生から有益なご意見を賜りました。英文要旨に関しては松香敏彦先生にご助言を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

明らかにすることが不可欠である。そこで本研究は、実会話コーパスを用いて、特定の状況における条件表現の使用傾向を明らかにし、各形式が選択される要因について議論することを目的とする。

条件表現は、形式によって統語的な制約があると言われているが(森田 1980)、実際の会話を調べてみると、条件表現の半数以上が、語彙化・慣用句化されたものであると報告されている(大野・キンベリー 2005)。語彙化された条件表現には、「そしたら」「すると」「それなら」「だったら」などの接続詞がある。本研究を行うにあたり、事前に『名大会話コーパス』(藤村他 2011)、『合本 女性のことば・男性のことば(職場編)』(現代日本語研究会編 2011)、『日本語話し言葉コーパス(CSJ)』(国立国語研究所 2006)に含まれる会話と現在構築中の『日本語日常会話コーパス(CEJC)』(小磯他 2017)の一部を用いて条件表現の使用頻度を調べた結果、おおよそ 454,628 の節単位¹(丸山他 2006)のうち、条件表現が 16,403 個、そのうち 1,319 個が接続詞で、その中で一番使用頻度が高かったのが「そうしたら」「(そしたら)」「そうしましたら」を含む²。以降「そうしたら」で代表させる)で 742 個(接続詞の中の 56.3%),次に多かったのが「そうすると」「(そすと)」「そうすと」「そうすつと」「そうしますと」を含む。以降「そうすると」で代表させる)で 275 個(同 20.8%)であった。そこで本研究は、この 2 種類の表現に注目して、それぞれの表現の使用状況を分析し、それぞれの表現が使用される要因について議論する。

本論文の構成は次の通りである。2 節で従来研究を概観する。3 節で分析の流れと使用するデータについて説明する。4 節から 6 節で 3 つの分析の方法とその結果を述べる。最後に 7 節で本研究の知見と今後の課題についてまとめる。

2. 従来研究

「そうしたら」と「そうすると」は、指示詞「そう」、動詞「する」に条件表現を示す接辞である「タラ」(助動詞「た」仮定形)、または「ト」(接続助詞)が接続した従属節と見ることもできるが、書籍や文献では接続詞として扱われていることが多い³。接続詞としての両者は、先行する文が真である場合の後件との因果関係を示すグループに分類されることが多い(佐治 1970, 石黒 2016)。条件表現のタラ形式とト形式の違いに関する研究は多く存在するが、特に「そうしたら」と「そうすると」の違いに関する研究は管見の限り見当たらない。森田(1980)は、「そうしたら」が接続する事柄には(1)仮定的な条件、(2)確定的な条件、(3)過去・完了の事実の 3 種類があり、「そうすると」には(1')假定条件を示す場合と(2')確定条件を示す場合があると述べている。しかし、両者を比較した説明ではないため、(1)仮定的な条件と(1')假定条件、(2)確定的な条件と(2')確定条件が同じことを指しているのか、(3)過去・完了の事実を接続するのは「そうしたら」だけの機能であるのか明確ではない。しかし、それぞれの特徴は明らかにタラ形式と

¹ 節単位は、形態論情報に基づいて機械的に計算したものであるため概数となっている。

² 「そしたら」は「そうしたら」の縮約形として(森田 1980)、本研究では両者を区別せず、同一のものとして扱う。

³ 「そうしたら/そうすると」が接続詞かどうかという問題は、接続詞とは何かという問題に関わるものであり、本研究課題の範囲を超えるものであるため、本研究では取り扱わない。

ト形式の性質の影響をうけているものと考えられる。また、他の研究でも、両表現はタラ形式、ト形式の性質を引き継ぐものと考えられている（本多 1998, 加藤 2003）。そこで、本研究においても分析の出発点として、両者の性質の違いは条件表現のタラ形式とト形式の違いと平行するものと考え、整理することにする。

日本語の条件文は、大きく 2 つの観点から研究が行われてきた（有田 1993: 225）。1 つは、事実の捉え方の観点である。前件と後件で表される事態は、現実成立している事実だけでなく、実現が不確かなことや、現実から独立した仮想的なことや、事実とは異なることがある。表される事態の事実関係によって使用される条件表現が異なると考えられており、さまざまな区分が検討されてきた。研究者によって基準や、各区分の呼び方はさまざまだが、「仮定」であるか「確定」であるかは区別されることが多い。仮定とは、一般に未来のこと、仮想的なこと、実現するかどうか不確かなことである。確定とは、現在や過去の事態などすでに実現した事態のことを指す。

もう 1 つの観点は、前件と後件がどのような関連性を持つかという点である。「一般／個別」、「必然／偶然」などのさまざまな対立的な概念による分類が提案されており、条件表現の形式の意味に対応させることが試みられている（有田 1993: 226）。

この 2 つの観点から、タラ形式とト形式の性質を確認することにする。まず、双方に共通する特徴として次が挙げられる。

1. 前件が成立した場合に後件が成立するという 2 つの事態の関係を表す。
2. 確定的な事態を表す場合、後件は予想外の出来事であることが多く、「発見・意外・驚き」のニュアンスを伴う（森田 1980, 蓮沼 1993, 加藤 2003）。

タラ形式、ト形式だけでなく、「バ」「ナラ」形式を含め、条件表現が持つ性質として、1 が挙げられる。益岡・田窪（1992: 192）は、「条件表現は、ある 2 つの事態間の依存関係を表す」としている。これは、ある事態（前件）の成立に依存して、もう一方の事態（後件）が成立するという意味である。

タラ形式とト形式で典型的に見られるものとして、確定的な事態のうち、一回的（偶発的）に生じた事態の関係を叙述し、「新たな認識の成立」を表す用法がある（前田 1991, 益岡・田窪 1992, 蓮沼 1993）。たとえば、偶発的に生じた 2 つの事態の連続的關係は、次の例のように接続助詞「テ」によっても表現することができる。

- a. 彼は本を閉じて、立ち上がった。
- b. 彼は本を { 閉じたら / 閉じると }, 立ち上がった。（森田 2007: 115, 302）

上記の例で、前者は単に 2 つの動作が連続していることを表現しているが、後者は出来事が予想外であるというニュアンスを含んでおり、新たな認識が成立している。

次に、タラ形式とト形式の違いについて整理する。表される事態の事実関係に関して、タラ形式は、仮定的な事態も確定的な事態も表すのに対して（益岡 1993, 森田 1980, 2007）、ト形式は、仮定的な事態のうち、反事実的事態を表す場合には使えないと言われる（益岡・田窪 1992, 益

岡 1993)。たとえば、「もし、私が鳥であれば、あなたのところに飛んでいけるのに」「あの薬を飲んでいたら、いまごろは大変なことになっていたところだ」(益岡・田窪 1992: 194) などのように、事実とは異なる事態を仮定してそれから出てくる帰結を述べる場合、バ形式、タラ形式、ナラ形式は使えるがト形式は使えない、もしくは馴染まないとされている。このことから益岡 (1993: 14) は、ト形式の中心的用法は、現実には観察された事態を表すことだと述べている。また、前件もしくは前件と後件で表される事態が一回的に生起することであるのか、反復・習慣的(多回的)に生起することであるのかで使い分けがあるとされ、前田 (1991) は、タラ形式は、多回的な事態を表す用例がほとんどないのに対し、ト形式は一回的・多回的共に使用されるとしている。

前件と後件の関係性については、さまざまな特性が提案されている。その1つは、[一般/個別]という対立軸である(益岡 1993, 前田 1991)。益岡 (1993) は、バ形式が「ちりも積もれば、山となる」のように、前件と後件の組み合わせによって時間を超えて成り立つ事態間の依存関係を表すのに対して、タラ形式は「もしおれのことを知れたら、おれもお前のこと、ばらすからな。」(筒井康隆「文学部唯野教授」)のように個別的事態の依存関係を表す点に特徴があると述べている。一方、ト形式は「春になると、花が咲く」のように、一般的な規則を表す際にも使用される。これは、バ形式と重なる性質で、タラ形式との違いとされる。前田 (1991) は、具体的な時間軸に位置付けられないテンスを示すことや、主体が不定であったり物のクラスであることを[一般]の特徴として挙げている。一方、益岡・田窪 (1992) は、話し手が事実として認識している依存関係という話者の認識を特性に入れており([話者の事実認識])、この場合ト形が使用されるとしている。また、森田 (1980, 2007) は、タラ形式が後件に話し手の考えや意見を積極的に示す形式([意見])であるのに対して、ト形式は後件に話し手が自由に決めた結果ではなく、前件が成立した場合必然的・自動的に決まる結果を表すとしている([任意性][必然的結果])。さらに森田は、自動的に成立する前件と後件の間に時間的余裕を持たないこともト形式の特徴として挙げており([連続性])、これは益岡 (1993) がト形式の文の基本は、前件で表される事態と後件で表される事態とが継起的に実現するものとして分かちがたく結びついていることを表すと述べていることと同じ発想と考えられる。

以上に見てきたように、タラ形式とト形式のそれぞれの特性について多くの研究者がさまざまな見解を示している。その多くは、前件と後件で表されている事態が事実であるかどうかや、前件と後件の関係に注目したものである。会話は、言語によって表される内容についての理解を会話参加者の間で構築してゆく共同の活動(Clark 1996)であるが、条件表現によって表される事態に対する会話参加者間の認識や理解という観点からの分析は見当たらない。

3. データ

本研究では、実際に行われた会話を収録したコーパスを用いて3つの分析を行う。分析1は、前件に注目し、従来議論されてきた事実関係についてアノテーションを行い、条件表現形式の使用傾向を検討する。分析2は、前件と後件の両方に注目し、条件表現の特定の用法に限定して、形式の使用傾向を分析する。分析3は、会話は参加者同士が協力して発話の理解を達成する共同

的活動であるという観点から条件表現の形式の使用傾向を分析する。

3.1 コーパス

分析対象として『日本語日常会話コーパス』（以降では CEJC と呼ぶ）（小磯他 2017）を用いる。CEJC は、現在構築中（2022 年完成予定）のコーパスで、2017 年 11 月時点で転記が終了し形態素解析まで施した 68 会話（約 28 時間、およそ 330,000 語⁴）を分析対象とする。CEJC を用いた理由として、1 つは CEJC にはさまざまな世代や職業の人たちが日常行っている多様な言語活動がバランス良く収録されていることが挙げられる（小磯他 2016）。もう 1 つは、条件表現を分析するためには、前件と後件が表す内容を理解する必要がある、そのためには映像や音声情報を参照することが必須となるからである。CEJC は転記だけでなく、分析に用いるための映像や音声整備されており、本分析に適している。

3.2 ターゲットの抽出

分析対象とする「そうすると」「そうしたら」、および前件と後件は以下の手順で抽出する。

- 手順 1. CEJC から「そうしたら / そうすると」を抽出する。
- 手順 2. 1 で抽出した各表現について後件を特定する。
- 手順 3. 2 で後件が特定できたものについて、前件を特定する。

条件節の場合、前件は従属節で表された事態であり、後件は主節で表された事態である。しかし、「そうしたら」と「そうすると」の場合、前件は条件節ではなく、指示詞「そう」によって参照される事柄である。その事態は以前の発話で言及されている場合もあれば、明確には言及されていない場合もある⁵。明確に言及されていない前件を特定するために、まず後件を特定し、その後件の成立に関わる前件を特定するという方法を用いた。後件は基本的に、「そうすると / そうしたら」の直後で「そうすると / そうしたら」を発した話者と同一人物が発した内容とした。ただし、直後に別の文が挿入されているような場合もあるため、直後の内容では文脈上明らかに不自然と感ぜられる場合には、直後ではなくそれ以降の内容を後件とした。アノテーションは手順 2、3 で前件と後件の両方が特定できたもののみを対象とし、どちらか一方でも特定できないものは分析対象外とした。

⁴ ここで「語」とは短単位（小椋 2014）のことを指す。語の数は総計で重複も含まれている。

⁵ たとえば、次の会話の断片では、前件は会話の場にあった説明書と状況であり、前提とされる発話がない。このような前件となる発話がない場合も、前件とされている事態が特定できれば分析対象とした。

（A と B が二人で協力してカラーボックスの組み立てを行っており、側板と背面の板と上下の棚板の接合が終わった時点で、A が組み立ての説明を見ている状態）
 01 B はい。
 02 A はい。
 03 A そしたら 立てますって。
 04 B うん。

(T001_002 1289.117 - 1291.976)

実際の事例でターゲットの抽出方法を説明する。会話断片 16 は CEJC に含まれる会話の一部で、本研究の分析対象となっている。表記法や転記に付与されている記号は基本的には CEJC で定められたものを用いているが（本稿末の「転記タゲ一覧」参照）、読みやすさのために分析に関わらない部分を簡略化している。「そうしたら」、もしくは「そうすると」は枠で囲んでいる。前件に関わる発話がある場合は点線の下線を付し、後件に関わる発話に実線の下線を付している（以降の会話断片においても同様）。ここでは、幼児の好ましくない行動への対応に関して 3 人 (A, B, C) が会話をしている。08 行目に話者 B が「そうすると」を発している。後件は、B のその直後の発話である 12 行目の内容と考えられる。そして、前件は「絶対に反抗する」という事態の成立に関することで、01 行目、13 行目、15 行目の発話から、「一、二歳の幼児に対してだめだめと言葉で注意すること」であると推察される。

会話断片 1 幼児の好ましくない行動への対応に関して会話をしている部分

01 C だめだめってゆうだけの[人も多い。
 02 B [でもね。
 03 A ああ。
 04 B [そうだよね。
 05 A [でも。
 06 C [うーん。
 07 A うーん。
 08 B [そうすると] そのね
 09 C [うーん。
 10 A [それは多いかも]しれ[ない。
 11 C [うーん。
 12 B [絶対に反抗するよ。
 13 B だめって[ゆわれると余計やりたくなんじゃない?。
 14 C [うん。
 15 B 一歳半か二歳なんてね。

(K001_003 674.556 - 684.537)

上記の方法を用いて、CEJC の 68 会話から、「そうしたら」と「そうすると」が用いられている会話を抽出した結果、46 会話においてどちらかの表現が用いられていた。それぞれの頻度は、「そうしたら」が 103 個、「そうすると」が 62 個であった⁷。合計 165 のうち、分析対象外は 14 あった。そのほとんどが、何らかの理由で後件が述べられなかった場合であった。以降は、この 14 ケースを除いた、151（「そうしたら」95、「そうすると」56）のケースを対象に分析を行う。以降の分析では、「そうしたら」「そうすると」をそれぞれ、タラ形式またはタラ、ト形式またはトで示すことがある。

⁶ 1 列目は、本稿において発話列を参照するための番号を付している。2 列目は発話者を識別する記号、3 列目が転記である。一番下の括弧内の記述は、左から CEJC における会話 ID、この会話断片の発話の開始時間、発話の終了時間（単位は秒）を示している。

⁷ 実際に使用された表示形式は、タラ形式は「そしたら」が 99 回、「そうしたら」が 4 回で、ほとんどが「そしたら」であった。ト形式では「そうすると」が 43 回、「そうすと」が 7 回、「そうすつと」「そすと」が各 6 回であった。この集計では「そうすると」と言おうとして「ほうすると」と言ってしまうような明らかな言い誤りは、「そうすると」に含めている。

4. 分析 1：条件表現が表す事態の事実関係

分析 1 では、条件表現が表す事態の事実関係について分類を行い、条件表現の形式の使用傾向を明らかにする。

4.1 方法

前件が表す事態の事実関係として表 1 に示した 6 項目の認定を行う。分類は、森田 (1980)、前田 (1991) を参考にしている。森田 (1980) は、タラ形式の用法を「不確かな未来、仮想」「ほぼ確定した未来」「現在」「過去」の 4 つに分けて説明している。森田は、仮定的な事態をその事態の実現の「確実性」によって、「不確かな未来、仮想」と「ほぼ確定した未来」の 2 つに分けているが、実際の会話で述べられる事態の確実性を判断することは困難であるため、この区別は行わなかった。ただし、ト形式は反事実的な事態を表す場合に使用されないとされていることから、実現しない事態であるか、将来起こることが予期される事態であるかを区別することにし、前者を「反事実」、後者を「未来」とした。過去と現在については、偶然的なことか、反復的なことから条件表現の形式が異なるとされていることから (前田 1991)、特定の具体的な事態を表している場合を「一回」とし、特定の事態ではない場合を「多回」とした。たとえば、会話断片 1 の前件である、幼児に言葉でだめだめと注意をすることは現在 / 多回となる。

表 1 前件の事実関係の分類

時制		内容
反事実		事実と異なること。または、起こることが想定されていないこと。
未来		会話参加者の将来の計画・予測・期待する (されている) こと。
過去	一回	過去のある時点で偶然に起こったこと。
	多回	過去に複数回起こったこと。過去の認識、知識、習慣。
現在	一回	会話中に行われていること。
	多回	過去、未来の特定の出来事に限定されないこと。複数回起こること。現在の認識、知識、習慣。

4.2 結果

CEJC から抽出した 151 個の条件表現について前件の事実関係を分類した結果を表 2 に示す。表内の数字は出現頻度を表し、括弧内の数字は形式内の割合を表している (表 3 についても同様)。

表 2 前件の事実関係別に見たタラ形式とト形式の出現頻度と割合 (N (%))

	反事実	未来	過去		現在		計
			一回	多回	一回	多回	
タラ	4 (4.2)	24 (25.3)	35 (36.8)	5 (5.3)	10 (10.5)	17 (17.9)	95 (100)
ト	0	11 (19.6)	1 (1.8)	11 (19.6)	6 (10.7)	27 (48.2)	56 (100)
計	4 (2.6)	35 (23.2)	36 (23.8)	16 (10.6)	16 (10.6)	44 (29.1)	151 (100)

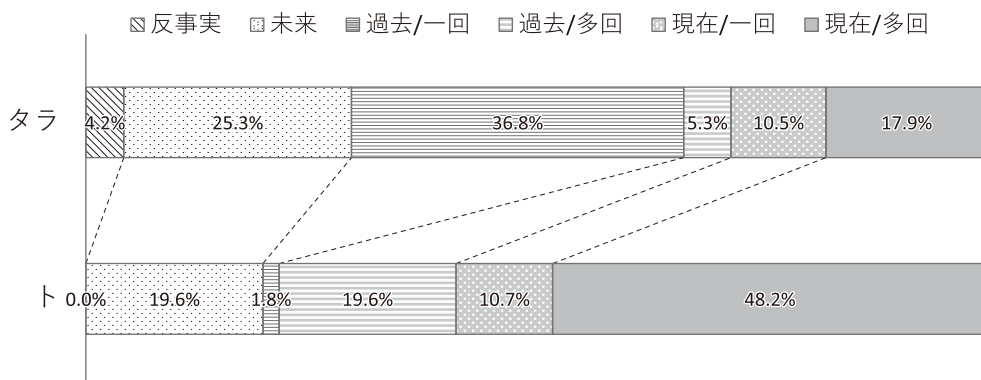


図1 形式別に見た前件の実事関係の割合

表2に示す通り、出現頻度全体で見ると、現在/多回、過去/一回、未来が多く、続いて過去/多回、現在/一回の順で、反事実的な事態を表すことは少なかった。反事実を表す場合は、すべてタラ形式が使用されており、ト形式は使用されていなかった。図1は前件の事実関係を形式別に割合で示したものである。形式別で見ると、タラ形式は、過去/一回の事態を表す場合が36.8%と一番多かった。それに対し、ト形式は前件が現在の多回的事態である場合が48.2%と一番多かった。

4.3 考察

従来、益岡（1993）をはじめとして、複数の研究者によって言われてきた、ト形式が反事実的な事態を表すことに馴染まないという点については、本研究で確かめられたと言える。一方、予想と異なっていたのはタラ形式の使用頻度である。前田（1991）は、タラ形式は多回的事態を表す用例がほとんどないとしていた。しかし、表2に示されているように、現在と過去を区別しなければ多回的事態を表す場合は一回性より少ないが、現在の事態だけで見れば、一回的事態より多回的事態を表す場合の方が多かった。また、従来研究からの予想と異なるわけではないが、特に指摘されてこなかったのはト形式の使用傾向である。前田（1991）によれば、ト形式は一回/多回のどちらも表す。このことから一回/多回で差があることは想定されていないと考えられる。しかし、本結果では過去、現在共に多回性的事態を表すことが多かった。

5. 分析2：[事実的用法]の出現状況

分析2では、前件が表す事態だけでなく、後件にも注目し、前件と後件を合わせて表される特定の事柄の叙述に、タラ形式とト形式のどちらが用いられているかを調査する。注目するのは、タラ形式とト形式に典型的に見られるとされる一回的に生起した規定の事態の関係を叙述し「新たな認識の成立」を表す用法である。これを蓮沼（1993）に倣い、[事実的用法]と呼ぶことにする。

前件と後件の依存関係については、[事実的用法]以外にもこれまで[一般/個別]、[話者の事実認識]、[意見]、[任意性]、[必然的結果]、[連続性]などさまざまな分類軸が提案されているが、これらの特性を実際の会話データに対し付与するためには、それぞれの特性を判断する明確な基

準を策定する必要がある。この作業のためには、一般とは何かということを定義してゆかねばならず、本研究の範囲を超えている⁸。そのため前件と後件の関係についての詳細な分析は今後の課題とし、ここでは比較的客観的に判断できる[事実的用法]に注目して定量的な調査を行う。

5.1 方法

CEJC から抽出した 151 個の条件表現から、前件、後件共に一回的に生起した規定の事態の関係を叙述しているものの同定を行う。[事実的用法]とは、たとえば会話断片 2 のような場合である。会話断片 2 では、A と B が以前に一緒に行った高尾山での出来事を C に話している場面である。高尾山には、通称「銭洗弁天」と呼ばれる金運を上げるための場所があり、そこで二人が現金を洗った際の出来事について話している。条件表現は 07 行目の「そしたら」で、後件は同じく 07 行目で述べられている「超汚なくなっちゃった」ことだと思われる。そして、前件は 03 行目で述べられている、洗ったお金（5 千円札）をジーンズのポケットに入れていたことだと考えられる。この事態は、過去の特定の時点で実際に起こった出来事を述べているため[事実的用法]となる。

会話断片 2 前件が過去の事態を表す[事実的用法]の例

(Bが銭洗弁天で5千円札を洗っていたという発言がAによって行われた後)
 01 A あたし [はもう [小銭だけ洗ったんだけど。
 02 C [銭 [洗。
 03 B [でも:それをむき出しで:[後ろのジーンズのポケット]に:[つつこんで(D テ)た(L ら)
 04 C [(L うん)。
 05 A [(L そう)。
 06 C [うん うん。
 07 A そしたらね 超汚なくなっちゃった(L ね)。
 08 B すごい汚く(L なっちゃったの)。
 (C001_001 1168.647 - 1175.315)

5.2 結果

CEJC から抽出した条件表現から[事実的用法]を抽出し、前件の事実関係別に頻度と割合を示したのが表 3 である。151 個の条件表現のうち、[事実的用法]は 41 件特定された。そのうちタラ形が 35 件、ト形が 6 件で、タラ形式の使用が多かった。形式別に見ると、[事実的用法]のタラ形式の 97.1%の前件が過去の事態を表しており、ト形式の場合は 83.3%が現在の事態を表していた。

表 3 前件の事実関係別に見た[事実的用法]の出現頻度と割合 (N (%))

	過去	現在	計
タラ	34 (97.1)	1 (2.9)	35 (100)
ト	1 (16.7)	5 (83.3)	6 (100)
計	35 (85.4)	6 (14.6)	41 (100)

⁸ [一般 / 個別] 以外の項目についても[意見], [任意性], [必然的結果]は基準の策定が困難である。[話者の事実認識]については、話者が事実と認識しているかどうかを第 3 者が判断することは実質的に不可能である。[連続性]はどの程度の時間間隔が空いた場合に連続ではなくなるのか判断する根拠に欠けている。

5.3 考察

前田（1991）や蓮沼（1993）らの先行研究では、[事実的用法]はタラ形式とト形式に典型的に見られるとされてきたが、今回の分析からタラ形式は前件が過去の事態である場合が多いのに対して、ト形式は前件が現在の場合に使用される傾向が見られた。

ト形式が使用される具体的な例を、会話断片3に示す。これはAとBが対面で旅行の計画をしている場面で行われたやりとりの一部である。二人は携帯電話でインターネットにアクセスし、飛行機の便を検索しながら会話を行っている。08行目でBが発している「そうすると」の前件は、目の前で行っている特定の条件を設定して検索を行うことで、後件はその結果起こることだと解釈できる。このように会話中に目の前で行われる事態が前件である場合にはト形式が使用される傾向があった。

この結果の説明として、森田（1967: 36）がタラ形式について、「事がらが起こってしまった場合を想定して、もしくはすでに生じた状態において、主題の人間や事物に起こった事がらや、その想定に対する話し手の立場・意見を叙述する」としていることが関係しているかもしれない。この説に従えば、過去の事態はすでに生じたことであるので、タラ形式が使用されたと説明できる。ただし森田は、事柄がまだ生じておらず、これから起こる場合、もしくは起こる予定もない状態を想定している場合については述べておらず、会話の最中に起こっている事態については説明できない。本結果は、会話が行われている目の前で起こっていることを前提とする場合にト形式が使用される可能性を示唆している。

会話断片3 前件が現在の事態を表す[事実的用法]の例

- 01 A 三十一か。
 02 B 三十[一でいいのか。
 03 A [で一日にたぶん着[くんだよね。
 04 B [帰ってくるってことだもんね。
 05 A うん。
 06 B じゃ 三十一出発でいいじゃん?。
 07 B で エ%コノミ検索する。
 08 B そうすると この(Wカチ|八)サイトからさ:[検索してくれてんじゃん?。
 09 A [うん。
 10 B H I Sとか。

(K001_014 359.036 - 383.860)

6. 分析3：前件で表される事態の確定性

分析2の結果、事柄がすでに生じてしまった場合を想定しているときにはタラ形式が使用され、目の前で起こっていることを前提とする場合にト形式が使用される可能性が示唆された。しかし、分析1で示されたように、「そうしたら」と「そうすると」は、起こる予定もないこと（反事実）や、これから起こること（未来）や、習慣的なこと（多回的）なども前件としても使用される。これらの出来事を前件とする場合のタラ形式やト形式の選択要因に、事柄がすでに生じてしまった場合を想定するということがどのように関係するのか不明である。

分析3では、会話が複数の参加者による共同的活動であるという観点から、分析1、および分

析2の結果をヒントにして新たな分析を行う。ある事柄が起こってしまった場合を想定するとき、話し手にとってその事態は確定したことである。一方、これから起こることなどの場合は、その事態は話し手にとって確定していない。会話は、言語によって表される内容の理解を会話参加者が共同で構築してゆく活動である。したがって、ある事柄が起こってしまったという想定も、会話参加者が共同で構築すると考えられる。前件によって表される事態に関する共同の理解がどのように構築されてゆくかは、さまざまな過程が存在すると想定されるが、前件の内容を誰が会話に導入したかということは、その内容の共同の理解に影響すると考えられる。そこで分析3は、前件を会話に導入した主体が、条件表現を述べる主体と同一か同一でないかのアノテーションを行い、前件を導入する主体によって条件形式の使用に違いがあるかどうかを検討する。

6.1 方法

前件の内容を述べた人物が「そうしたら」、もしくは「そうすると」を発話した人物と同じ場合は「自分」、同じではない場合は「他者」とする。ただし、前件の事態の話者が特定できない場合もある。たとえば、会話参加者で話し合って決めた内容を前提とする場合や、発話はなく、会話の場にあったものや事柄（会話状況そのものや説明書の内容など）を前提とするような場合である。このように前提の内容が議論の結果決まった内容であったり、そもそも存在しない場合だったり判断が困難な場合は「その他」とした（表4）。これまでの節で挙げた事例では、会話断片1、会話断片2は他者、会話断片3は自分である。

表4 前件で表される事態の確定性に関する分類

自分	条件表現の話者が会話に導入した内容
他者	自分以外の参加者が会話に導入した内容
その他	上記以外（自分と他者で話し合った内容、会話の内容以外の場合など）

6.2 結果

表5に、前件を導入した主体（「自分」「他者」「その他」）と形式（「タラ」「ト」）を組み合わせ、前件の事実関係から見た分類ごとの出現頻度を示す。また図2に、前件の導入主体別に見た形式の割合の結果を示す。

表5 前件導入主体・形式・事実関係ごとの出現頻度

(N)

		反事実	未来	過去		現在		計	合計
				一回	多回	一回	多回		
自分	タラ	0	10	33	5	1	3	52	95
	ト	0	5	1	11	5	21	43	
他者	タラ	3	12	2	0	2	13	32	38
	ト	0	3	0	0	0	3	6	
その他	タラ	1	2	0	0	7	1	11	18
	ト	0	3	0	0	1	3	7	

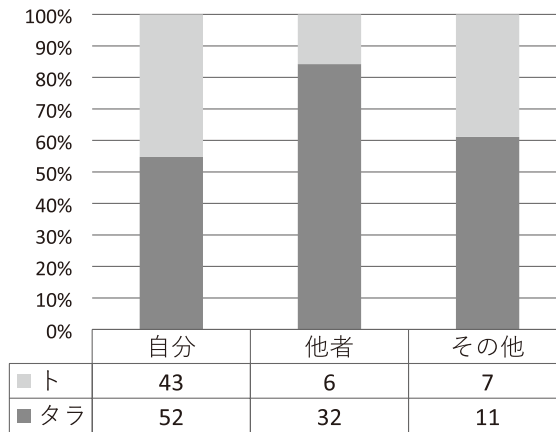


図2 前件導入主体別に見た形式の割合

表5から、全体として、前件を自分が述べる場合が95回、他者が述べる場合が38回、その他が18回であり、自分、つまり条件表現と同じ話者が前件を導入する場合の方が多いことが分かる。また図2から、前件の内容を他者が導入している場合は、タラ形式が84%と非常に多く用いられる傾向が見られた。一方、前件を自分が導入する場合には、こうした形式の偏りは見られなかった。そこで、前件を自分が導入する場合に限定して、事実関係別に形式の割合を求めた(図3)。この図から、前件を自分が導入する場合、過去ではタラ形式が76%、現在ではト形式が87%と、過去と現在で異なる形式が頻出する傾向が見られた。なお未来の場合、タラ形式とト形式の全体の割合(63%, 37%)とほぼ同じであり形式による差は見られなかった。

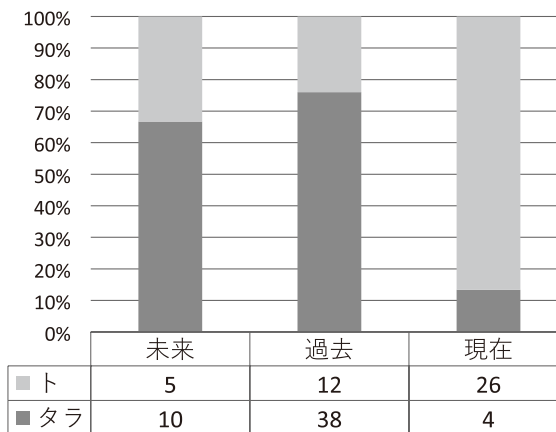


図3 事実関係別に見た形式の割合(前件の導入を自分に限定)

6.3 考察

分析3の結果、前件を他者、つまり会話の相手が導入した場合や、前件が過去の事態を表す場合にタラ形式が使用され、前件を自分が導入した場合のうち現在についてはト形式が使用される

という傾向が見られた。話し手は前件の内容が確定したものと想定している場合にタラ形式を使用するとするならば、他者が前件を導入した場合に話し手はその内容を確定したものとする傾向があると言える。この理由は、会話が共有知識を共同で構築する活動であるという観点（Clark 1996）から容易に説明できる。会話の相手が導入した内容は、相手にとって既知のことであるため、その会話の中で確定したこととして扱うことができるが、自分が導入した内容の場合は相手にとって確定したことではない。そのため、相手が導入した内容の場合はタラ形式、自分が導入した場合はト形式が使用されると説明できる。次の2つの例を比較してみたい。

会話断片 4 現在の事態を表す前件を他者が導入する場合

- 01 B 今ひと学年六組なんていう学年 学校あんのかな。
 02 A (R 新井)。@小学校名
 03 B (R 新井)はそうなんだ。[(W フンゴイ|すごい)ね。
 04 C [へー。
 05 A (W アホコ|あそこ)マンモスなの。
 06 C あそこ何人?。
 07 C 学校の人数。
 08 B だって:そしたら ひと学年 二百人近くいるってことでしょ?。
 09 B うーわ。すげえ。

(T003_015 1116.539 - 1131.416)

会話断片 5 現在の事態を表す前件を自分が導入する場合

- 01 A なんかあたし ご飯が好きなの。
 02 B [そうです[よね。
 03 C [うん。
 04 A [で そうすると カレーしか選択肢がなくて
 05 A [そすと チキンしかないじゃない?
 06 B [うんうん。

(K002_018 99.811 - 104.280)

会話断片 4 と会話断片 5 は、どちらも前件が現在の多回的（習慣的）な事態で、後件がその事態が真であるとした場合に成立する事態を述べている点で類似しているが、条件表現の形式が異なっている。会話断片 4 は、4 人が参加している会話で主に A と B が小学校の 1 学年の人数について話題にしている部分である。08 行目で B が「そしたら」を用いている。この前件は、特定の小学校（「新井」は仮名）は、1 学年 6 組あるという事態であると考えられる。この前件に対して、小学校の 1 クラスの人数はある程度予測できるため、その予測に従うと 1 学年 200 人近くいることになるということを B が述べており、これが後件と考えられる。前件は、01 行目の B、02 行目の A の発話の両方に関わるが、後件の内容の成立に必要なのは実際に 6 組ある小学校が存在することであり、それを述べている A が前件を導入したと考えられる。

会話断片 5 は、友人同士の 4 人が、レストランでランチを食べている間に行われた会話の一部である。このレストランのランチのメニューでご飯がつくのはカレーだけであり、カレーはチキンカレーしかない。そのため、A は、ご飯が好きであるという前件（01 行目）に対して、カレー

しか選択肢がなく (04 行目)、さらに、カレーしか選べない (04 行目) という前件に対して、チキンしか選択肢がない (05 行目) と述べている。この例では、「そうすると」が 2 回使われており、そのどちらも前件を導入したのは、条件表現を用いた話し手自身と考えられる。

従来、2 つの形式の特徴として提案されてきた [一般/個別]、[話者の事実認識]、[意見]、[任意性]、[必然的結果]、[連続性] 等を適用することはそもそも困難であるが、敢えて判断しようとした場合でもこの 2 つの例を区別する決定的な違いはないように思われる⁹。そのため、従来研究ではこの 2 例で異なる条件形式が使用される理由を説明できない。しかし、前件の内容が会話参加者にとって確定的かどうかという観点で考えると会話断片 4 と会話断片 5 には違いがある。会話断片 4 の前件は他者が導入したために、前件の内容は会話参加者の間で確定したものと考えられる。そのため、タラ形式が使用されたと説明できる。一方、会話断片 5 は自分が導入したために、その内容が会話参加者にとって確定されたものとは限らない。そのためト形式が使用されたと説明できる。

分析 3 の結果、前件が未来の事態の場合には、前件を導入した主体ではタラ形式とト形式の使用の区別ができないように思われる。しかし、前件が表す事態が会話参加者にとって確定的なことであるかどうかという観点で考えることで形式の選択を説明できる場合もある。次の 2 つの事例を見てみたい。

会話断片 6 と会話断片 7 は別の会話であるが、どちらも複数人が将来共同で行う特定の事柄について合意を形成する場面で行われたやりとりの一部である。会話断片 6 は、PTA の役員たちが式典で流す音楽をピアノの生演奏にするか、音楽 CD を作成してそれを式典で流すかどうかについて話している場面である。ピアノの演奏者を毎年探すのは大変であるため CD を作成することの利点が述べられている。具体的には、11 行目の「そしたら」の前件は、01 ～ 10 行目のやり取りから「CD を作成すること」で、後件は、11, 15, 17 行目で話者 E が発した「それがあるだけで～楽になる」で表された E の意見と考えられる。会話断片 7 は、市民グループが講習会を行うための会場を予約する方法について話している場面である。05 行目に A によって発せられる「そうすと」の前件は 03, 04 行目の B の発話である「(施設管理の担当者に) 直接言う」ことであり、後件は 05 行目の「そうすと」の直後の「面倒くさくない」という意見である。

この 2 つの事例は、将来行う共同的活動の提案内容が前件で、その提案を実行した場合に起こることが予想される事態が後件に置かれている点で前後の関係は類似している。また、従来主張されてきた前件と後件の関係においても決定的な違いはないように思われる。しかし、前件の提案が会話参加者間で合意が得られているかどうかという観点から見ると、会話断片 6 の場合は 01 行目から 10 行目にかけて、他の会話参加者が同じ表現を繰り返すことで CD を作ることへの

⁹ 会話断片 4 は今の小学校、もしくは特定の学校のことを述べており、会話断片 5 は、話し手自身のことを述べているため両者とも [個別的] と考えられる。どちらの例も、話し手が自由に決めた結果ではなく、ある程度必然的な結果と言える。また、どちらも前件と後件に内容的な連続性はない。敢えて差をつけようとするならば、会話断片 4 は、相手から聞いた内容に基づいた推論結果であるため話し手が事実と認識していないのに対して、会話断片 5 は自分自身の性質に基づいた推論結果であるため事実と認識していると言うことが可能かもしれないが、話し手が事実と認識しているかどうかの判断は不確実である。

同意を示していると捉えられるのに対して、会話断片 7 は、B だけが前件の内容を話しており、会話参加者間で合意が得られているとは言い難い。そこで、会話断片 6 の場合は、会話参加者の間で前件が確定したことであるためタラ形式が使用され、会話断片 7 の場合は、前件の内容が確定していないためト形式が使用されたと説明できる。また、両者の例で使用されている形式をもう一方の形式に置き換えてみた場合、明らかに意味が変わるとは言えないものの、微妙に不自然に感じるのは、会話断片 6 では前件の提案が会話参加者間である程度合意が得られているのに対して、会話断片 7 の場合は、合意が得られていない点に起因すると思われる。

会話断片 6 合意形成場面で「そうしたら」が使用される場合

- 01 E 毎年作る必要はなくて[一個あればいい]だけだから。
 02 D [そうだよね。
 03 A [そう。
 04 A [一個あればいい。
 05 B [一個あればいい。
 06 D [一個あればいい(U もんね)。
 07 A [うーん。
 08 B [うーん。
 09 C [ね。[毎年同じ(L 音楽)でもいいもんね。
 10 E [ね。それ。そう。
 11 E [そしたら]それがあるだけ[で: なんか仕事。ね。
 12 D [うん。
 13 A [うーん。
 14 D [うん。
 15 E 使っていいって方向んなれば;
 16 D うん。
 17 E あの一個仕事が[減ってだいぶ(L こう)(L 楽にはなる)。
 18 D [うん。

(T003_017 500.773 - 513.762)

会話断片 7 合意形成場面で「そうすると」が使用される場合

- 01 A やってる人経由で押さえらんない?。
 02 B だから別に運営(W イン|委員)会じゃなくてもいいんじゃないのかな?。
 03 B 直接ゆってみてもいいんじゃない?。@施設管理の担当者に直接言う
 04 B そのほうが[楽なんじゃない?。
 05 A [そうすと]めんどくさくない?。
 06 A なんか登録してないと: とかさ: あのー色々々。

(T004_017 92.888 - 107.273)

本節では、前件の事態を会話に導入した主体が条件表現を使用した主体と同じであるか否かが、条件表現の形式の選択に関わる傾向が見られたことから、前件の事態が会話参加者にとって確定的なことであるか否かが条件表現形式の選択の要因になっているのではないかと考え、実際に観察されたデータに対する説明を試みた。その結果、従来研究では説明できない条件表現の使用を説明できることを示した。

7. まとめ

本研究は「そうしたら」と「そうすると」という2つの条件表現の形式に着目し、その使用状況を現在構築中の CEJC を用いて定量的に調査した。最後に、本分析の知見と今後の課題について述べる。

7.1 本研究の知見

本研究の知見としては次の2点が挙げられる。1つは、前件の事実関係とタラ形式かト形式かの選択が強く関連していることを示したことである。これまでの研究は、条件表現を仮定的用法と確定的用法で大別し、確定的用法については、過去の事態と現在の事態を区別しての定量的な調査を行ってこなかった。しかし、分析1の結果、前件の事実関係によって、タラ形式とト形式の使用には偏りがあることが示された。特に、従来主張されてきた[一回/多回]という性質や、タラ形式とト形式に典型的に見られるとされた[事実的用法]で、前件が表す事態が過去であるか現在であるかで条件表現の形式の使用が異なるという分析2の結果は、これまで検討されてこなかった点である。これらの発見は、これまで十分に行われてこなかった定量的な調査を行ったこと、また分析の対象に実際の会話を取り入れたことによる成果と言える。

もう1つの知見は、タラ形式とト形式の選択要因に関わる新たな要因を提案し、それによって従来の研究では説明できない両形式の使用差を説明できることを示したことである。その要因とは、前件の内容が会話参加者にとって確定的なことであるか否かというものである。これまで、条件表現によって表される事柄に対する話し手の認識の違いによって条件表現の形式の違いを説明することは、森田(1967)や益岡・田窪(1992)らによって行われてきたが、本研究は、条件表現を用いる話し手だけでなく、前件によって表される事柄に対する会話参加者の共同的な認識が形式の選択に関わることを示した。

7.2 今後の課題

本研究では条件表現の中でも接続詞として扱われることの多い「そうしたら」と「そうすると」に限定して分析を行った。タラ形式とト形式の違いを明らかにするためには、その他の表現でも今回と同様の傾向が見られるのかを確かめる必要がある。また、条件表現には他に「ナラ」「バ」を接辞とするものがある。タラ形式とト形式の使用が会話参加者の共通の理解の構築過程と関わるのであれば、ナラ形式やバ形式ではどのような関わりがあるのか等の問題も非常に興味深く、データに基づく定量的な分析による解明が必要だと思われる。また、従来研究で述べられてきた[一般/個別][必然の結果][任意性]等のさまざまな前件と後件の依存関係と本研究結果との関係についても十分に議論できなかった。

本研究では、タラ形式とト形式を入れ替えてもあまり意味が変わらないような場合に、前件の事態が会話参加者にとって確定したことかどうかという観点を取り入れることでタラ形式とト形式の使用差を説明できることを示した。しかし、前件と後件の関係によっては、明らかに入れ替えることができない場合がある。条件表現の選択には、複数の要因が関わっていると考えられる。

これらの要因がどのように関係しているのか、一方の要因は他の要因の結果生じている派生的なものなのか、それともどちらも関係しているのかなどの解明が必要であり、今後の課題である。

転記タグ一覧

本稿の転記で使用したタグの一覧を以下に示す。タグの詳細については、川端他(2017)を参照。

タグ	タグ概要	使用例
:	非語彙的な母音の引き伸ばし	すご:い, デー:タ
%	非語彙的な音の詰まり	す%ごい, 解%析
?	疑問上昇調	行きます?, コップ?
(D)	語の言いさし	(D コ)明日から
(W)	言い誤り・発音の怠け等の一時的な発音エラー	(W コエ これ), (W ギーツ 技術)
(L)	笑いが生じている箇所	(L), これ(L なんですか)
(R)	個人情報などに関わる仮名・伏字処理候補	(R 国語研究所)の(R 佐藤)さん
。	発話単位末	食べます。, やったけど。, うん。
@	転記単位に対するコメント	スパ@車の愛称
(U)	聞き取りや語の判断に自信がない箇所	(U 外国/外交), だよ(U ね)。

参考文献

- 有田節子 (1993) 「日本語条件文研究の変遷」 益岡隆志 (編) (1993), 225-278.
 有田節子 (2017) 『日本語条件文の諸相—地理的変異と歴史的変遷—』 東京: くろしお出版.
 Clark, Herbert H. (1996) *Using language*. Cambridge: Cambridge University Press.
 藤村逸子・大曾美恵子・大島ディヴィッド義和 (2011) 「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」
 藤村逸子・滝沢直宏 (編) 『言語研究の技法 データの収集と分析』 43-72. 東京: ひつじ書房.
 現代日本語研究会 (編) (2011) 『合本 女性のことば・男性のことば (職場編)』 東京: ひつじ書房.
 蓮沼昭子 (1993) 「『たら』と『と』の事実的用法をめぐって」 益岡隆志 (編) (1993), 73-97.
 本多真紀子 (1998) 「接続詞スルトについて—命題レベル / 判断・発話レベルの観点から—」 『待兼山論叢 日本語学篇』 32: 17-32.
 石黒圭 (2016) 『「接続詞」の技術』 東京: 実務教育出版.
 加藤陽子 (2003) 「日本語母語話者の体験談の語りについて—談話に現れる事実的な「たら」「ソシたら」の機能と使用動機—」 『世界の日本語教育』 13: 57-74.
 川端良子・白田泰如・西川賢哉・徳永弘子・小磯花絵 (2017) 「『日本語日常会話コーパス』の転記基準と作業工程」
 『言語資源活用ワークショップ 2016 発表論文集』 296-306. 東京: 国立国語研究所コーパス開発センター.
 小磯花絵・居関友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉 (2017) 「『日本語日常会話コーパス』の構築」 『言語処理学会第 23 回大会 発表論文集』 775-778.
 小磯花絵・土屋智行・渡部涼子・横森大輔・相澤正夫・伝康晴 (2016) 「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する基礎調査」 『国立国語研究所論集』 10: 85-106.
 国立国語研究所 (2006) 『日本語話し言葉コーパスの構築法』 (国立国語研究所報告 124) 東京: 国立国語研究所.
 Kuno, Susumu (1973) *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA: The MIT Press.
 前田直子 (1991) 「条件文分類の一考察」 『日本語学科年報』 13: 55-80. 東京外国語大学.
 丸山岳彦・高梨克也・内元清貴 (2006) 「第 5 章 節単位情報」 国立国語研究所 (2006), 255-322.
 益岡隆志 (1993) 「日本語の条件表現について」 益岡隆志 (編) (1993), 1-20.
 益岡隆志 (編) (1993) 『日本語の条件表現』 東京: くろしお出版.
 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法—改訂版—』 東京: くろしお出版.

- 森田良行 (1967) 「条件の言い方」『講座日本語教育』3: 27–43. 早稲田大学語学教育研究所.
 森田良行 (1980) 『基礎日本語 2』東京: 角川書店.
 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京: 東京堂出版.
 中島悦子 (2007) 『条件表現の研究』東京: おうふう.
 小椋秀樹 (2014) 「第4章 形態論情報」山崎誠(編)『書き言葉コーパス—設計と構築—』68–86. 東京: 朝倉書店.
 大野剛・キンベリー ジョーンズ (2005) 「文法規則の使用と形式の選択の実際」南雅彦(編)『言語学と日本語教育 IV』73–85. 東京: くろしお出版.
 佐治圭三 (1970) 「接続詞の分類」『月刊文法』2(12): 28–39. 東京: 明治書院.

関連 Web サイト

- 国立国語研究所『大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究』<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/> (2018 年 1 月 15 日確認)
 国立国語研究所『名大会話コーパス』<https://mmsrv.ninjal.ac.jp/nucc/> (2018 年 1 月 15 日確認)
 国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/ (2018 年 1 月 15 日確認)

Usage of “soushitara” and “sousuruto” in Everyday Japanese Conversations: Analysis of the Corpus of Everyday Japanese Conversation

KAWABATA Yoshiko^a DEN Yasuharu^b

^aAdjunct Researcher, Spoken Language Division, Research Department, NINJAL /
 Doctoral Student, Chiba University

^bChiba University / Invited Professor, Spoken Language Division, Research Department, NINJAL

Abstract

The Japanese language contains several forms of conditional clauses such as “tara,” “to,” “ba,” and “nara,” and numerous researchers have attempted to syntactically and/or semantically describe their differing functions. Prior studies usually focus on the theoretical usages of conditional clauses by examining if interchanging them, changes the sentences’ meanings; few studies examine how different conditional clauses are actually employed. To better understand this aspect, we analyzed the usages of conditional clauses in the Corpus of Everyday Japanese Conversation (CEJC, Koiso et al. 2017). In particular, we focused on the two most frequently appearing lexicalized expressions of Japanese conditional clauses in the CEJC – “soushitara” and “sousuruto.” In Analysis 1, based on a traditional approach, we examined if the usage pattern of the two forms differed when the states of fact about antecedents varied. In Analysis 2, we selected conditional clauses associated with specific content from the corpus, subsequently examining whether the expressions of antecedents and/or consequents associated with the two conditional clauses differed. In Analysis 3, we reanalyzed data utilized in Analyses 1 and 2 by assuming that conversation is achieved by collaborative acts among agents to understand each other. Results revealed that although they may be syntactically and semantically interchangeable, “soushitara” and “sousuruto” are clearly employed in different ways, and differential usages can be attributed to variations in the states of fact about antecedents. In addition, the results of Analysis 3 provide an innovative way to differentiate between “soushitara” and “sousuruto” where no previous model or theory was applicable.

Key words: conditional expression, “soushitara,” “sousuruto,” corpus study